ラトナラクシタ著『パドミニー』の冒頭偈および廻向偈

種村隆元・加納和雄・倉西憲一

はじめに

ラトナラクシタ（1150-1250年頃）の手になるインド仏教終焉期のタントラ注釈書『パドミニー』は、『サンヴァローダヤタントラ』を釈しながら、随所に著者の広い知見を披歴する、ある種の綱要書的な性格も有した稀書である。目下我々はその梵文校訂を順次発表しつつあり[1]、基礎資料と書誌情報を網羅した研究序説をすでに報告している[2]。本来であれば、その序説のなかに『パドミニー』の冒頭偈および廻向偈の梵語原文と和訳を提示し、その偈文中に織り込まれた同書の著作動機を明かしておいてしかるべきであったが、果たせなかったため、ここに別出する次第である。

本稿では、したがって、冒頭偈および廻向偈の梵文原文と和訳とをあわせて提示し、さらに解説を加えてゆきたい。校勘記には主要な写本一本（Takaoka CA 17、略号 Ms）の読みのみ提示した。

梵文テクストと和訳

［冒頭偈］

（冒頭偈第一偈、帰敬）

gambhīraṃ jagadekajīvananidhiṃ niḥśeṣaratnodayaṃ
nānāścaryaśatāśrayaṃ vibudhasaṃdohena saṃsevitam |
lakṣmyā sāmṛtayā samanvitatanuṃ sādhuprasādāspadaṃ
sevadhvaṃ bhuvi saṃvarodayamahātantraṃ payodhiṃ budhāḥ ||

[1] 既に校訂テキストを発表している章は次の通り。第21章（種村 2009）、第22章後半部（種村 2014）第13章前半部（倉西 2014）。第1章は近刊予定。
[2] 種村・加納・倉西 2014。

Acta Tibetica et Buddhica 7: 139-149, 2014.
© Faculty of Buddhism, Minobusan University, JAPAN

奥深く、生き物たちを育む唯一の宝庫（/世界の最高存在という唯一の宝庫）、あらゆる宝石（/〔三〕宝）の源、幾百もの多様な奇瑞（/驚異的な力）にとってのよりどころ、神々によって撹拌されたもの（/賢者衆に親近されるもの）、その身体にはアムリタを手にするラクシュミー女神を伴い（/その本体に不死（涅槃）の吉祥さを伴う）、完全な透明さにとっての基盤である（/聖者たちの恩恵にとっての基盤である）、サンヴァローダヤマハータントラという大海に、賢者たちよ、あなた方はこの世で、従い実践すべし。

（冒頭偈第二偈、著作宣言）

guruprasādadīpārciḥpradhvastadhvāntadhīdṛśā |
dṛṣṭāḥ katipaye hy arthā likhyante sāṃvarodayāḥ ||

師の恩恵という灯の明かりによって闇が払われた炯眼にて僅かばかり見られたところの、サンヴァローダヤの諸々の意味内容が、書き記される。

（冒頭偈第三偈、著作動機）

śakyo yady api mādṛśena katham apy antaḥpraveśo 'sya na
prārabdhā vivṛtis tathāpi kuśalābhyāsodayākāṅkṣayā |
śaktāḥ kecana naiva cet talaparisparśāya pāthonidher
iṣṭārthāṃ kim utāpnuvanti vidhinā taṃ gāhamānāḥ śriyam ||

a: antaḥ°] em., anta° Ms.; **a**: na] em., nu Ms.; **d**: kim utāpnuvanti] em., kim u nāpnuvanti Ms.

たとえ、私のような者は、これ（タントラという海）の奥深くに入り込むことがどうしてもできないとしても、それでも、善行の反復修行を引き起

こそうと望んで、解説に着手するのである。
もしも、どんなやり方でも大海の表面に触れることすらできないというのならば、ましてや、正しいやりかたでそこ（タントラという海）に深く潜る人たちが、望ましい吉祥に到達することなどありえようか。

［廻向偈］

（廻向偈第一偈）

śiṣyābhyarthanayā śrutānugamataḥ proktaṃ na garvādinā
yad duṣṭaṃ tad iha kṣamasva janani śrīvajravārāhi me |
jātāndhasya nisaṅgadurgamapathāntaḥsaṃsthitasyāsti (49r9) kaḥ
saṃdehaḥ patanaṃ prati pratimuhus †tenopacitam aharṣaṇaṃ† ||

a: °arthanayā] em., °arthanatayā Ms.; **b**: duṣṭaṃ] em. (cf. Tib. skyon), dṛṣṭaṃ; **c**: nisaṅga°] conj. (for niḥsaṅga°?), nisarga° Ms.; **c**: °pathāntaḥ°] conj., °pathā° Ms.; **d**: patanaṃ] conj., kṣinanaṃ Ms.; **d**: tenopacitam] conj., tenopacitaṃm Ms.

弟子たちに懇願されて、かつて学んだところに従って〔本書は〕説かれたのであり、けっして慢心などに動機づけられたわけではない。なんであれ誤謬があるならば、それにかんして、母なる吉祥ヴァジュラヴァーラーヒーよ、ここで私をお赦しください。
介助なく悪路の真ん中に佇む生盲者（のごとき私）が転ぶことに、なんの疑いがあろうか。〔以下仮訳〕†それ（間違った疑念）により好ましくないことがくりかえし積み重なる†。

（廻向偈第二偈、廻向）

api ca śiśuta uktir vyarthavyastavarṇā-
pi hi janayati mātur modam eva prakāmam |

iti manasi nidhāyaivedam uktvā yad āptaṃ
kuśalam iha tad āstāṃ viśvasambodhisiddhyai ||

a: api ca] conj., api Ms.; **b**: śiśuta uktir] conj., śiśutoktir Ms.; **b**: vyarthaka°] em., ṣvarthaka° Ms.

さらにまた、幼子による発言は、たとえ意味なくでたらめな発音であったとしても、母には、ただひたすら喜びをもたらす。
このようなことを重々念頭に置き、本〔書〕を説き終えたあとで、ここで得られたところの善、それがあらゆる者にとっての正覚の成就のためとならん。

（廻向偈第三偈、著作による功徳）

kiñ ca,
siddhācāryaparaṃparāgatasadāmnāyārkasamparkato
bhrājanmānasapadminīparimalodgāro 'yam ārohatu |
mohād dīrgham itas tataś ca vikalaṃ viśrāntam udbhrāntakaṃ
bhavyendindiravṛndacittam atulānandāya mandāyituṃ ||

b: °mānasa°] em., °mānasasa° Ms.; **c**: vikalaṃ] em., vikala Ms.; **d**: °vṛndacittam] em., °vṛndaciccittam Ms.; **d**: mandāyituṃ] em., mandāyitaṃ Ms.

さらにまた、
成就者たる師より相承された正しい口伝の陽光と連結することにより、この輝ける心の（/マーナサ湖面の）蓮の芳香の滲出が、高く上りますように。
愚鈍さゆえに、永い間、あちらこちらで、混乱、疲弊し、さまよった、〔しかし〕機縁に恵まれた、蜂の群がりという心が、無比なる歓喜のために、

陶酔させるべく〔この滲出が高く上りますように〕。

解説

（冒頭偈第一偈解説）

冒頭偈は三偈からなる。そのうち第一偈は、「サンヴァローダヤマハータントラ」（注釈対象）たる「大海」への親近を促す。前半三連（a～c句）には、その両者を形容する七の修飾語が並び、各語には二重の意味（śleṣa）が込められている。つまり形容句に表裏二つの趣旨を含ませ、それぞれが「タントラ」と「大海」とに関与する内容となっている。まとめると下記の如くである。

「タントラ」	「海」
1 深遠な	深い
2 世界の最高存在という唯一の宝庫？	生き物たちを育む唯一の宝庫
3 全〔三〕宝の源	あらゆる宝石の源
4 あらゆる驚くべき〔力〕の源	幾百もの多様な奇譚の拠り所
5 賢者たちにより奉仕される	神々たちにより搾乳で奉仕される（乳海攪拌）
6 その本体に不死（涅槃）の吉祥さを伴う	その身体にはアムリタを手にするラクシュミー女神を伴う
7 聖者たちの浄信にとっての基盤	完全なる透明さの基盤

第一の形容句 gambhīraṃ には、教えの「意味が奥深い」タントラと、海底までの距離が「深い」海、という両義がある。

第二の形容句 jagadekajīvananidhiṃ には、「世界の最高存在という唯一の宝庫を有する」タントラと、「生き物たちを育む唯一の宝庫」である海、という両義で理解した。ただし前者については必ずしも明瞭ではない。

第三の形容句 niḥśeṣaratnodayaṃ は、「全〔三〕宝の源」たるタントラと、「あらゆる宝石の源」たる海、という両義で理解した。このようにタントラが三宝すべての源泉であると理解する場合、文字表現された教えを体とするタントラが仏典で

あることを考慮すると、それは法宝にのみ相当するのではないかという疑問が生じるかもしれない。たしかにそれはひとつの解釈であろう。しかし次のように考えることも可能である。

すなわち後期インド密教において、タントラを因タントラ・果タントラ・方便タントラに分ける分類法がある。この場合、果タントラとはタントラの実践の結果であるところの境地、すなわち大持金剛の位である。このことについてたとえば、ラトナーカラシャーンティは以下の様に説明している。

Ratnākaraśānti's *Guṇavatī*:

tantram iti prabandham. trividhaṃ tantram, hetutantraṃ phalatantram upāyatantraṃ ca. tatra prakṛtiprabhāsvaram anādinidhanaṃ cittaṃ bodhicittaṃ sa hetus tad bījam. kasya bījam? bodheḥ. samyaksambodhiḥ phalaṃ niruttaraphalatvāt. sā punas tasya eva prakṛtiprabhāsvarasya cittasyāgantukasarvāvaraṇakṣayalakṣaṇā viśuddhiḥ. sā buddhānāṃ dharmakāyaḥ sambhoganirmāṇakāyasaṃgṛhītānām anantānāṃ buddhadharmāṇām āśraya ity arthaḥ. saiva buddhānāṃ bodhir dharmakāyo mahāvajradharapadam. (p. 2.11-17)[3]

【和訳】「タントラとは相続 (prabandhaḥ) である。タントラには3種類ある。〔すなわち〕因タントラ、果タントラ、方便タントラである。そのうち、本性清浄なる無始無終なる心、すなわち菩提心、それが因であり、それが種子である。何の種子であろうか？菩提の〔種子〕である。正等覚が果である。なぜならば〔それが〕無上の果であるからである。その〔菩提〕はその同じ本性光明なる心の偶発的なすべての障害を滅することを特徴とする浄化である。それは諸仏の法身であり、報身と化身を包摂した無限の仏法の基体であるという意味である。それこそが諸仏の菩提であり、法身であり、大持金剛の位である。」

[3] 上記引用のテキストは Harunaga Isaacson 氏より頂いた etext をもとに刊本の読みを訂正したものである。Isaacson 氏に謝意を表します．尚、言うまでもなく、上記引用中のテキストに見られるいかなる誤りも著者に責任がある。

また一方、ラトナラクシタ自身が『パドミニー』第一章の中で援用する『宝生論』においては、真如が三宝の源泉であることが説かれている。

Ratnagotravibhāga 1.23:
samalā tathatātha nirmalā vimalāḥ buddhaguṇā jinakriyā |
viṣayaḥ paramārthadarśināṃ śubharatnatrayasaṃbhavo[4] yataḥ ||

【高崎和訳】[5]「有垢なる真如、また、無垢なる〔真如〕、垢を離れた仏の諸特性とジナ（＝仏）のはたらき—〔これは〕最勝の義理を見る〔仏〕たちの領域であり、そこから清浄なる三宝が生れ出る〔ところの源泉である〕。」

もし著者が冒頭偈の saṃvarodayamahātantra という語句において果タントラを意図しており、「大持金剛の位」が「真如」と同義と理解してよいならば、タントラが三宝の源泉であるという理解は十分成り立つと考えられる。

第四句 nānāścaryaśatāśrayaṃ は、「あらゆる驚くべき〔加持力〕の源」たるタントラと、「幾百もの多様な奇譚にとっての拠り所」たる海、という両義で理解した。

第五句 vibudhasaṃdohena saṃsevitam は「賢者たちにより奉仕される」タントラと、「神々たちにより搾乳で奉仕される」（乳海攪拌）海、という両義で理解した。前者の「賢者」は菩薩を指すとみてよい。後者は、人口に膾炙する、乳海攪拌神話であり、次の第六句にも関与する。

第六句 lakṣmyā sāmṛtayā samanvitatanuṃ は、「その本体に不死（涅槃）の吉祥さを伴う」タントラと、「その身体にはアムリタを手にするラクシュミー女神を伴う」海、という両義で理解した。前者の場合、amṛta は涅槃と同義であり、この等置はたびたび仏典にみられる。後者の場合、amṛta は乳海攪拌から得られたエッセ

[4]『宝性論』梵文写本（Ms B）および Schmithausen 1971: 140 によって Johnston の読み °sargako を °saṃbhavo とする。
[5] 高崎 1989: 36.

ンスであり、文字通り不死をもたらす妙薬である。そして神話においてラクシュミー女神は、乳海攪拌から生まれるため、第五句とのつながりが意識されているとみて間違いない。

最後の第七句 sādhuprasādāspadaṃ は、「聖者たちの浄信にとっての基盤」たるタントラと、「完全なる透明さの基盤」たる海、という両義として理解した。前者は、聖者たちが信仰する対象としてのタントラに言及しており、後者は、透き通った海水を納める器としての海について語っていると考えられる。なお、sādhuprasādāspada「完全なる透明さ」は、究竟次第で到達する prabhāsvara の状態を示唆している可能性もある。ラトナラクシタが聖者流の実践に通じていたであろうことは、『パドミニー』の nidāna に対する秘儀的な註釈の箇所からも推測できる。

なお当偈では「タントラ」が「海」に喩えられるが、「海」＝「宝の源」(ratnākara) なので、大きな意味で「宝」に関係する。これは著者の名前ラトナラクシタに関連している可能性もある。

（冒頭偈第二偈解説）

第二偈では著作宣言がなされる。このうち katipaye は男性、複数、主格と理解し、dṛṣṭāḥ に掛かると理解して訳した[6]。

（冒頭偈第三偈解説）

この冒頭偈の最終偈には、著作動機が記される。『サンヴァローダヤタントラ』を「海」に喩える第一偈をそのまま継承する。著者ラトナラクシタ自身は、その海の深奥にたどり着くことこそできないけれど、少なくとも本注釈書『パドミニー』が、その海の水面、つまりタントラの表面的な意味に触れるための手引きとなる旨を主張する。

（廻向偈第一偈解説）

同偈の前半句には本書『パドミニー』が弟子に懇請されて、かつて学んだことに

[6] 苫米地等流氏のご教示による。

従って著作された旨が記される。この前半句の意味は明瞭である。それに対して後半句は乱脱が認められ、内容は晦渋を極め、復元困難である。提示した仮訳はごく暫定的なものである。

c 句 nisaṅga は、写本の形 nisarga では文脈にふさわしい意味が得られない。意味としてはチベット訳にある grogs med 「介助なく」がよくあう。しかし grogs med と対応する niḥsaṅga「介助なく」という読みに校訂すると、韻律が破綻する。それゆえ、苦肉の策として、テクストは nisaṅga と韻律に合う語形としながらも、それは niḥsaṅga を意味するものと解釈した。再考の余地が残される。

そして d 句に至っては意味を取ることも、復元案を提示することもできなかったため、その解決については保留したい。

なお同偈後半句のチベット訳は、「介護なき生盲者が進み難い道に正しく入ることはできない。刹那毎に錯乱し疑念を抱くものである。それをどうかお赦しください」[7]とあり、上掲の梵文とは異なる。

（廻向偈第二偈解説）

当偈の a 句については韻律の上で、6 つの短音節が連続する必要があると考え、写本の読みである śiśutoktir を、śiśuta uktir と変更した。すなわち、śiśutaḥ uktir → śiśuta uktir → śiśutoktir という過剰な連声（double sandhi）によって生じた乱脱（corruption）と理解した。これによって韻律を回復することができる。

（廻向偈第三偈解説）

b句の、 bhrājanmānasapadminīparimalodgāraḥ には表裏両義あると理解した。すなわち「マーナサ湖にある蓮の群生」という意味と、「輝ける心に到達するための『パドミニー』というテキスト」という意味とである。

ここに「マーナサ湖」（カイラーサに位置するマナサロワール湖）という言葉が選択されている意味を深読みすることが許されるならば、この文言は、『パドミニ

---

[7] skyes pa'i long ba grogs med bgrod dka'i lam du yang dag gnas pa yod min te ‖ skad cig so so sor 'khrul zhing the tshom du gyur des na bzod par 'os ‖ ただしこのチベット文は韻律上、一音節不足している。

ー』がチベットで著作されたというターラナータの説[8]に関与するものと考えることができるかもしれない。

d句の atulānandāya mandāyituṃ については、動詞と同族目的語からなるものと解釈して、「無比なる歓喜に導くために」と理解することもでき、この「歓喜」はいわゆる「倶生歓喜」を指す可能性もある。

おわりに

以上、『パドミニー』の冒頭偈と廻向偈の原文と和訳を提示することによって、同書の著作意図を確認した。三偈からなる冒頭偈では、タントラを海に喩えて、その海に入る手がかりとして『パドミニー』を著した旨が、謙遜の言葉を重ねながら語られていた。

そして同じく三偈からなる廻向偈では、弟子に請われて、本書が著されたのであり、慢心によるものでないことが語られる。そして本書の内容が師子相承の教えにもとづいていることを強調する。ここに表明されるラトナラクシタの態度は、アバヤーカラグプタなど先行する碩学に忠実な本書中の筆致と軌を一つにする。

参考文献一覧

（梵文資料）

Guṇavatī Ed. Samdhong Rinpoche and Vrajavallabh Dwivedi, *Mahāmāyātantraṃ* with *Guṇavatī* by Ratnākaraśānti, Sarnath, 1992.

Ratnagotravibhāga Ed. E.H. Johnston. Patna: The Bihar Research Society, 1950.

（二次文献）

倉西憲一

2014 「Padminī 第13 章校訂テクストおよび註（1）」『大正大学綜合佛教研究所年報』36、177-194頁。

[8] 種村・加納・倉西 2014: 2 参照。

高崎直道

1989　『宝性論』、講談社。

種村隆元

2009　「*Saṃvarodayatantra*第21章 Caryānirdeśapaṭalaに関する一考察—*Padminī*第21章校訂テキスト並びに註—」、『密教学研究』41、23–39頁。

2014　「Ratnarakṣita著*Padminī*第22章— Pratiṣṭhāセクションのサンスクリット語校訂テクスト—」、『現代密教』25、97-126頁。

種村隆元・加納和雄・倉西憲一

2014　「Ratnarakṣita 著Padminī研究資料概観」、『大正大学綜合佛教研究所年報』36、163-176頁。

Schimithausen, Lambert

1971　Philologische Bemerkungen zum Ratnagotravibhāga. *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens* 15. 123-177.

（平成26年度科学研究費「注釈文献から見た後期インド密教における教理と実践の関係に関する研究」［基盤研究(C), 25370059、代表: 種村隆元］および同「密教思想と他の仏教思想との関係性—ヴィクラマシーラ寺院の学僧の著作群を中心に—」［基盤研究(B), 26284008、代表: 久間泰賢］による研究成果。）